

【心を映す顔】

原島 博先生 基調講演

HARASHIMA HIROSHI



このシンポジウムは、第1回「進化し続ける顔」、第2回「表現される顔」に続き、第3回目を迎えました。シンポジウムの企画者の一人として、毎回最初の30分間は、私が基調講演としてお話ししております。今回のテーマは「心を映す顔」です。

顔から心を知る

なぜ人は、顔から心を知ろうとするのでしょうか。それは、生きていくために必要なことだからです。これは、人間が現在のように進化する前からのことで、まず生存競争を勝ち抜くためには、危険な相手を瞬時に見抜かなければいけません。もう1つ重要なことは、その種が減んでしまわないように、自分と一緒に子孫を残す共同作業をしてくれそうな相手を探すということです。

2
これが人ではなくて猿だったら、その気のある相手をお尻で見るかもしれないかもしれません。もしも美猿コンテストというものがあったら、お尻で選ぶかもしれないわけです。ところが人間の場合は衣服を着ているので、お尻は見えません。唯一いつも見せている裸の部分、それが顔なのです。プラカードのように、一番見やすい所にある顔を見て、相手が危険な存在なのか、あるいはその逆なのかを判断します。顔にすべての情報が集中しているということで、人間の世界では、ミスコンテストは顔を重視してやっているわけです。

人間は、裸の部分、つまり顔からどうやって人の心を読もうかということに、ずっと関心を持ってきました。文献をいろいろ調べてみると、古代ギリシャ時代から人相学があったようです。アリストテレスが人相学に凝っていたという話もあります。

16世紀、17世紀になると、印刷技術が普及したということもあって、いろいろな本が出版されています。16世紀のナポリ、ちよどルネッサンスの後半には、当時でいえばインテリだったデラ・ポルタという人が、「人の顔は、どういう動物に似ているかによって、その人の性格がわかる」というようなことを言っていました。「この人はライオンに似ている」ということは、「ライオンのような性格を持っている」と。

17世紀のシャルル・ル・ブラン、フランスの人ですが同じことを言っています。「フクロウに似ている人は、フクロウのような性格をしている」と。フクロウのような性格と言われても、私にはイメージがつかめない

のですが、ヨーロッパではフクロウは重要な鳥ですので、例にあげたの
でしょう。このように、どういふ動物と似ているかによって、その人の性
格がわかるということが言われていたのです。

顔は科学となるか

さらに18世紀になると、顔が科学になってきました。厳密には、科学
を装って、骨相学とか観相学がもてはやされました。その1つとして、脳
科学者のガルの器官学があります。そのあとの人が「ガルの骨相学」
と名づけています。

当時から、脳は場所によって機能が違っているのか、それとも脳全体
ですべての役割を果たしているのかという論争がありました。「大脳の
機能局在論」といって、大脳のそれぞれの部分で役割が違い、それぞ
れの部分でどういふ性格であるかということを示している。そういう仮
説をガルが立てて、「人間の精神活動には27とおりある」と。我々が普通
にいわれている性格と同様に、「殺人」というのも精神活動らしいので
すね。「殺人をする性格」というものもあって、脳のそれを司っている部
分が大きい人はそういう性格だということです。骨を見れば、つまり骨を
覆っている顔を見れば、その人の性格がわかるということです。

一見科学的な説を唱えて、これがとんでもなく人気になりました。もと
もと人は、顔から心を見たいわけですから。それが科学的であるというこ
とで流行になって、19世紀の1832年、パリに骨相学会という学会が設立
されました。さらにそれが、骨相学だけではなくて、顔面学へと発展して
いきました。

その一つが顔面角です。額、鼻の下、耳穴、それを結ぶと角度ができ
ます。これを顔面角と呼ぶのですが、その角度が大きければ大きいほど
動物は進化している、高等であると言われました。ところが、これがだん
だんと政治的に利用されていきます。その典型がヒトラーです。ヒッ
ラーは、「この観点からすると、ドイツ民族が一番優秀である」と言い出
しました。それがご存じの、優生学的な人種差別になっていったのです。
結局、一見科学的な装いを持って登場してきた当時でいう顔学が、結果
としてとんでもない差別に結びついたという歴史があります。

このような過去があって、「科学が顔を扱うと危険だからやめようで
はないか」という風潮になって、その後は顔に関する学問は発展しませ
んでした。日本顔学会は、世界で初めてできた顔そのものの学会です。
現在でも、日本以外には顔の学会はないのです。それは、顔を学問の対
象にすることは非常に危険だということで、近代科学が避けてきたから
だと思います。

顔から性格がわかる

本日の皆さんの関心は、「顔から心がわかるか?」ということだと思います。たとえば心理学者に顔を見せると、自分の心、例えば性格を全部読まれるのではないかというふうにお思いの方がおられるかもしれません。

しかし私が知っている限りでは、心理学者にそのような能力を持っている方はおられません。自分の目の前にいる人の顔を見て、「あなたはこういう性格でしょう」とか、そのようなことを言うのは、危険だということになっています。私も、科学者としてはそういうことは決していません。でも私自身も普通の人間でもありますから、皆さんと同じように、なんとなく顔から人の心がわかるのではないかというふうに、思っています。顔を見れば、その人の、その時点での感情がわかるかもしれない、あるいは性格がわかるかもしれないということです。

ある方が、こういうことを言われました。「目と眉がどういう配置になっているかによって、その人の性格がわかるのだよ」。極めてシンプルな話なのですが、その話を聞いて、私も実験してみました。

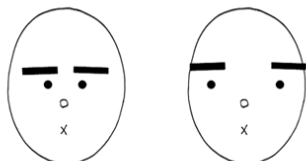
この2つの顔の絵は、目と眉の位置を変えただけです(笑)。目と眉を顔の内側のほうに寄せるか、外側に広げるかだけですが、私自身、作ってみてびっくりしました。なんとなく左のほうが神経質そうな印象がありますよね。「この人、いろいろなことにクヨクヨするのではないか」というような印象がある。それに対して右のほうは、のんびりした感じがする。右と左、やはり性格が違いそうな気になるわけですね。

もう少し変えてみましょう。目と眉の位置を内側、外側だけでなく、傾きも変えてみます。左側は眉がちよっと怖そうで、攻撃的になります。

右側は、「なんかこの人、大丈夫かい?」という感じ(笑)。無防備な顔になってしまいます。

では、眉の太さをちょっと変えるとどうなるのでしょうか。もっと攻撃的になったり、

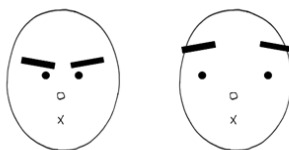
目と眉を内側/外側に寄せると……



神経質そうな印象

のんびりした印象

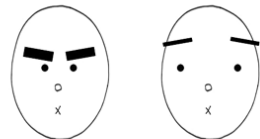
さらに眉の傾きを変えると……



攻撃的になる

無防備になる

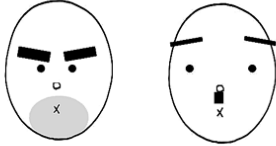
眉の太さも印象に影響がある



もっと攻撃的になる

もっと無防備になる

ヒゲも効果的である



もっと攻撃的になる

もっと無防備になる

もっと無防備になったりします。

さらに、ヒゲだけでもこんなに変わります(笑)。左側は、かなり攻撃的になっています。右側もヒゲをつけていますが、攻撃的というよりは、むしろ惚けた感じになります。

眉と目の位置は同じなのに、太さをちよっと変えただけで、性格が全然違った

ように見えるというのは、一体どうしてでしょうか。本当に、このように顔を見た時に、「その人はそうなのだろう」と、我々が思う印象というのは、正しいのでしょうか。考えてみれば変ですよ。眉、目というのは、物理的な位置ですよ。物理的なものと、その人の性格が関係している。本当にそうなのでしょうか。

しかし、もしかしたら、たしかに関係があるかもしれないのです。というのは、人間、悩む時は、どうしても内側に目と眉が寄りますよね。目と眉をこうやってひそめて、だんだん自分の内側に入っていく。そうすると、いつも悩んでいる性格の人は、いつもこういうふうになっているから、自然に顔もそうになってしまうということはあるかもしれない。逆に、目と目の間をぐーっと離すと、絶対に困った顔にはならないのです。

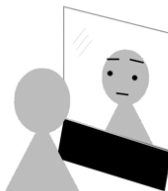
そうすると、その人が、ふだんどういう気持ちでいるかが顔に表れるということは、たしかにありそうです。でも、それだけではないかもしれない。もしかしたら性格が顔に出るのではなくて、先に顔があって、「自分はこういう顔であるから」ということで、その人の性格が作られるということもあるのではないかと、思い始めました。こういうことに気づいたのは、まさに本日、「心を映す顔」というテーマで何か話さなければいけないと一生懸命考えたからなのです。

顔が性格をつくる

たとえば、「顔が性格を作る」と言ってもピンとこないかもしれませんが、皆さん、毎日鏡に映っている自分の顔を見えていますよね。そこに映

っている顔が、さっきの眉と目の間隔というと、たとえば目と目の間隔である、眉が上のほうに上がっていると、のんびりした性格のように見える。のんびりした性格に見えるような顔が鏡の中に映っていると、「まわりにいる人たちは、自分の顔を見てのんびりしているというふうに思うのだろうなあ」と思い、「まわり

顔が性格を作る？



鏡にのんびりしている
顔が映っている

きつと皆、僕はのんびりした
性格だと思っているだろう。

その期待に応じて、のんびりした
性格のように振る舞ってみよう。

もしかしたら、本当に自分
ののんびりしているのかもしれない。

のんびりとした性格になる。

の人がそう思っているのだったら、そのように振る舞ったほうがいいのではないか」という気持ちになって、そう振る舞っているうちに、もしかしたら本当にのんびりした性格になってしまうかもしれません。顔が先で、その顔に自分の性格を合わせていくということもあるのではないかと思います。

実はこのようなことは、けっこうあるのです。たとえば顔でなくても、着ている服によっても性格が変わります。毎日きちとしたスーツを着ていると、きちとした性格になります。カジュアルなものを着ていると、カジュアルな性格になります。外見は、その人の気持ちや性格も左右するのです。

それと同じように、顔も外見ですから、どのような顔をしているかでその人の性格も変わってくる可能性があります。顔と性格はそれなりの関係があって、顔から性格を読むことができるということは、それなりに説明ができるわけです。

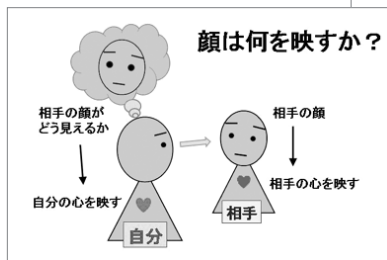
ただ問題なのは、関係があるとはいえ、それがどこまでしっかりした関係なのかということです。100%なのか、70%なのか、あるいは50%なのか、それが問題なわけです。もし70%当たっていたら、人相学だったら拍手喝采です。ところが科学は、70%当たるだけでは危険です。社会は、科学者の言うことは100%確かだと思ってしまうからね。70%がそうで、30%がそうでないというように学会発表したとしても、マスコミは、「顔から性格が読める」という学会発表があったと、受け止めてしまいます。

70%なのに100%としてとらえてしまいますと、残りの30%は、本当はそういう性格でないのにも関わらず、そのようにレッテルを貼られ、差別を受けるかもしれないのです。それは危険だということで、科学では「顔から心が読める」とは、はっきりと言わないということになっています。と同時に、本当に科学的にやろうとすると、単に顔と性格は関係があるかという表層的なことだけではなく、もっと深いところまで入っていかなければいけません。

顔は何を映すか

心を映す顔、これが今回のシンポジウムのテーマです。皆さんは、顔にその持ち主の心が映されている、そのようにこのテーマをとらえていることでしょう。実は私は、別の解釈も成り立つのではないかと

と思っています。すなわち「相手の顔を見る時、その見えている顔は、その顔の持ち主(相手)の心を映すのではなく、顔を見ている『自分の心』



を映しているのかもしれない」。

要するに、相手の顔が神経質そうに見えるときは、その人が神経質なのだろうというように思うかもしれないけれども、もしかしたら、相手の顔を見て、そのように感じている自分の心をそこに映しているのかもしれない。

顔は、どのような気持ちで相手を見るかによって、見え方が変わってきます。客観的に見えるのではなくて、相手の顔を見る時に自分の気持ちが反映されてしまうのです。私は「顔というのは、客観的に存在するのではなくて、見る人と見られる人の関係の中にある」という言い方をしています。

たとえば、指名手配写真の顔。悪い顔をしていますよね。どうして悪い顔なのでしょう。それは「この人は悪い人だ」と思って見るから悪いのです。顔が指名手配中の写真として交番の前に貼ってあったら、誰でも悪い顔だと思って見ます。ところが一方で、実は世界的な脳科学者の顔だと知って、同じ顔を見るとそれほど悪い顔には見えない。むしろ、いい顔だというふうに見えるかもしれません。

顔は、イメージなのです。顔は単独では存在しない。見る人と見られる人の関係の中であって、自分がその人に対してどういうイメージをあらかじめ持っているかで、そのイメージが重ね焼きされます。

イメージが良ければ、その顔は良く見えます。悪ければ、その顔が悪く見えます。悪い犯罪者だと思って見ると、悪く見える。素晴らしい脳科学者だと思って見れば、素晴らしい顔に見えます。

顔というのは、そういうものなのです。よく、「人間、顔じゃないよ、心だよ」という言い方をします。「顔はどうでもよくて、心が大切だ」という言い方です。顔学者としては、「顔が大切だよ」というように言いたいのですけれども、考えてみたら、顔を良く見せるためにも心が大切なのです。いい心を持っていれば、いいイメージになる。「この人はいい人だ」という目で見てくれる。そうすると、顔も良くなっていく。そういうことだろうと思います。

いい顔はいい関係から

そろそろ結論に入りたいと思います。今まで申し上げたことをまとめますと、やはり、顔から相手の心を読みとることはある程度は可能だと思います。そして、それと同時に、実はそこに自分の心も映しているのだろうと思います。自分の心も映しているということは、見る人と見られる人の関係を映している。自分と相手がどういう関係であるかが、相手の顔がどう見えるかということと関係しています。

相手と話していて、相手の顔が良く見えだしたら、それは、自分と相

手の関係が良くなってきているということです。会社でも、上司と部下が互いに相手の顔が良く見えだしたら、それは顔が良くなったというだけではなくて、関係が良くなっていくということなのですね。女性と話をする時も、時間とともに相手が美人に見えだしたら、これはしめたものです。こちらも楽しいし、そのときはたぶん相手も自分の顔を格好良く見てくれているのだらうと、私は勝手に信じています。

このように、「いい顔」と「いい心」は、密接な関係があります。そして、それは「いい関係」をつくるという相手との共同作業で生まれるものなのです。共同作業は、自分のほうから積極的に行うことが重要です。それは「いいコミュニケーション」によって可能となります。私自身の本当の専門はコミュニケーション工学ですが、顔というのは、まさにコミュニケーションそのものだと、つくづく思っています。

ということで、以上が私の基調講演の結論です。本日は「顔と心」ということで、私自身は、「いい顔、いい心、いいコミュニケーション。これらは三位一体である」というのを、とりあえずの基調講演としての結論にさせていたきたいと思います。

このあと、お二人から、「顔を見る心 その発達」「顔は心の鏡である」と題したご講演をいただくことになっています。どうぞご期待ください。どうもありがとうございました。

いい顔、いい心、
いいコミュニケーション

これらは三位一体である。

原島 博(はらしま ひろし)氏 プロフィール

東京大学大学院情報学環・学際情報学府 教授・同工学部電子情報工学科兼任
1945年東京生まれ。68年東京大学工学部電子工学科卒業。73年同大学院博士課程修了。同年同工学部講師、助教授を経て現在に至る。工学博士。映像の構造化と知的符号化を中心とする知的コミュニケーション技術、感性コミュニケーション技術、また、空間共有コミュニケーション技術の研究に従事。日本顔学会会長も務める。「顔学への招待」など著書多数。